

『自然の災害について』

一、災害の歴史 自然は人に豊かな天恵を興えているが時としてわざわざいを下す。その中でも風水害の被害は甚だしい。佐馬地村の歴史はじまつて以來そのような災害に何度出合ったことであろうか。田村左源太先生の著書「馬路川洪患志」や「佐馬地村史」を見ると次のような風水害の記録が出ています。

- 享保六年（一七二一）丑（佐馬地川） 大洪水
- 宝歴六年（一七五六）子（〃） 大洪水
- 文政十二年（一八二九）丑（〃） 丑年の流大洪水
- 天保十三年（一八四二）寅（〃） 寅年の大洪水 大洪水
- 嘉永二年（一八四九）酉（吉野川） あほう水 大洪水

安政四年（一八五七）己（〃） 八朔水 大洪水

慶應二年（一八六六）寅（佐馬地川） 大洪水

明治十一年（一八七八）寅（〃） 大洪水 佐野馬路に大山くずれ

明治十七年（一八八四）申 洪水特に風の被害大

明治三十年十月二日（一八九七）酉（吉野川） 大洪水

明治三十二年八月十六日（一八九九）亥（吉野川） 銅山流れ 大洪水

大正元年九月二十三日（一九一〇）子（佐馬地川） 大洪水

昭和九年九月二十一日（一九三四）戌（〃） 洪水

昭和十三年九月五日（一九三八）寅（〃） 大洪水

昭和二十年九月十七日（一九四五）酉（佐馬地川） 山崩れ 洪水

1、昭和十三年九月五日の大洪水 田村先生の記録によれば南北洋上に発生した台風が九月五日午前六時室戸岬南方百軒に近づき五日午前十時過ぎ徳島縣南部に上陸し徳島市西方を通つて北へ抜けたとあり徳島では風速二九米をこえたそうである。この台風は台風としてはさほど大きくはないが本村一帯に猛烈な大雨を降らせ馬路川は一時に水がさがふえ大損害を興えたのであつた。

「當地方は夜明け前雨となり十時頃より西寄りの強風に伴う豪雨盆をくつがえすと言ふべきか車軸を流すと言ふべきか、その激烈さ筆舌の及ぶ所ではない」と田村先生はのべられている。今尙馬路川の兩岸にその當時の大損害のあとが生々しく残つている。数十町歩に及ぶ田畑が流され、百数十戸の家屋が流失又は

破壊せられた。

2、大正元年の風水害 九月二十三日徳島東部を通つた台風によるもので二十三日午前三時より午前五時頃までの間大降雨、前夜から二十三日朝まで大風、そのため流失したり埋まつたりした田畑宅地は数十町歩に及んだ。其の他の損害も非常に大きかつたと馬路川洪患志は傳えている。

3、その他 以上は最近の大洪水であるが文政十二年丑年の流れは更に大きなものであつたと傳えている馬路川洪患志に「前略、口碑によれば七日七夜降りつき、處々に山津波が起り馬路川の井堰はことごとく決壊し翌春はあゆが佐野までさかのぼつた」と傳え又「天保十三年寅年の大洪水にはこれ又馬路川を佐野まであゆがさかのぼつたといわれている。天保十三年の洪水で北名の馬谷は土砂を押し出し数戸の家屋を埋め、水路は北名の北がわをまわつて住吉の下に流れた。馬路深川の堂床の太木は山津波と共に押し流されて土居の田の中に立ち、宮の谷の洪水は土砂を流して境宮境内を埋め、ために大杉と大銀杏の根本は深く埋められた。佐野の山崩れは今に津惠の地名を残している」のである。慶應明治の年も寅年も亦同様であつたと言う。

二、災害は繰り返す 馬路川の災害記録はかくも痛ましく歴史をいろどつている。本村は四國の島の北側にあり南東の方からの風で雨が降る時は雨量が少ないが北又は西の風で降る時は瀬戸内海の濕氣が大雨をもたらすのである。馬路や佐野には「西降り用心」のことばあると洪患志にあるのは、この事をよく示している。

大災害のあつた時は村民も村當局も眞剣に對策を考えるが災害のきずもなおり人々の心から忘れ去られた頃又もや次の災害が襲つて來るのである。

前にあげた馬路川の大洪水の歴史を見てもほど氣付かれると思うが大洪水は或る年数をおいて必ずやつて來るのである、大地震などもそうであり氣象現象もそうである。いつかは又大豪雨の見舞う事を予想する時私達はじつとしてはいられない。雨の降るのを防ぐ道はないが災害の程度を最少限に喰ひ止めることは人間の力で或る程度出来ることである。

本村は昔から薪炭の産地で山は立木か十四、五年もすれば次々と木炭などに切られるので水の保ちが悪い上に北方は砂岩で弱くかつ急傾斜と來ている。その上に川床は年々高くなつて一寸した洪水でもすぐ兩岸をのりこえる何とかしてわざわいを少なくする手段はないものだろうか。

三、山くずれと地すべり 山腹に地下水が湧いているところなどは表土と母岩の間に侵入してそこがやわらかくなり一度大雨が降るや忽ちのうちに表土がすべりはじめ、こうして一度動き出したらば之をさえざるものは何もない、その力は益々大きくなつて地ひびきを立て、荒れ狂う泥流は谷間に向つて落下する。家位は何の苦もなく押しつぶされマツチ箱をひつくりかえしたようにばら／＼にしてしまう。このような地變を山くずれと言ひ、大きなものを山津波と名づけている。又表土がゆるやかに移動する場合は地すべりと呼ぶのである。馬路川南岸は地層が北に傾斜していて地すべりを起しやすく、北岸は急斜面で土質が弱いので、又地すべりを起しやすく。

昭和二十年九月十七日の風水害の時には全村到る所に山くずれがあつたことはまだ記憶に新しいことである。